

渡邊 守邦 教授

「戦後文学の志をめぐって——「白日の記録」(亀島貞夫)、「戦中手記」(鮎川信夫)のことなど——」

栗原 敦 教授

今回は、大学院生二人の発表に加え、二名の先生方から日頃の研究の一端を披露していただいた。大学院生にとっても教員の研究内容や方法論を知る上で、大いに勉強になったことと思う。

〈編集後記〉

月日の経つのは早いもので、本学に十九年間奉職され、学科の重鎮であられた渡邊守邦教授が定年にて退職されることになった。先生は深い学識を備えられている上に、江戸文学の粹を体現されたような方で、野暮な振る舞いや発言を嫌われた。会議の席上でも余計なことは決して言わず、発言されるときは、ひとの気がつかないことを寸鉄のごとく短く述べられ、皆の蒙を啓かれることが常であった。

私も今年度、先生の大学院の講筵に連ならせていただき、本作りなどの実際の作業を教えていただく榮に浴することができた。そこで大変羨ましかったのは、多くの学生が先生を慕い、卒業後も先生の元に通ってくる人の多いことであつた。そうした受業生の中から、研究者として活躍中の三名の方々に論文を、先生の大ファンであつた三名の方々に「思い出」を執筆していただいた。先生の学徳を記念する縁となれば幸甚である。

(影山 輝國)